

第1回 「核兵器の非人道性」オスロ会議の報告（2013年4月11日）

講師／長崎原爆病院院長・RECNA 客員教授 朝長万左男

2013年3月4、5日にノルウェーのオスロ市で開催されたノルウェー外務省主催のオスロ会議「Humanitarian Impact of Nuclear Weapons（核兵器の人道的影響）」に出席し、日本政府代表、非核特使として20分間の講演をした。127か国から各4～5人の代表団のほか、国連機関やNGO、宗教団体などから約500人が出席する、核兵器を人道的な側面から検討する初の大規模な国際会議となった。

参加国・団体
127ヶ国の政府代表団 国際赤十字委員会(ICRC) 国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC) 国連諸機関 ICAN(市民NGO・宗教団体)
出席者数 500名超
「核兵器の人道的影響」に特化した歴史的国際会議
Eide外相の開会演説 今なぜ人道的側面なのか？

ノルウェーのアイデ（Eide）外務大臣は冒頭演説で、冷戦終結後から20年を経た今も核兵器は存在し、保有しようとする国は後を絶たず、さらに、テロ集団が核爆弾を入手する危険があるという厳しい現実を指摘し、人類にとってこの状況を解決することは政治的な最優先課題であり、核爆発によってもたらされる被害の実態を知ることが、本会議の趣旨であると説明した。五大核保有国（5P）は会議に参加しなかったが、いわゆる核の傘に入っているNATO諸国からはほぼ全ての国が出席し、日本も被爆医療専門家の私と日本原水爆被害者団体協議会（被団協）の田中熙巳氏を含む代表団を送った。このほか、核兵器保有国であるインドとパキスタンに加え、核拡散が懸念される中東からはイランが出席するなど127か国が集い、招聘された専門家による講演が2日間にわたって行われた。

セッション1「核爆発の即時的影響」

セッション1では、イギリスやノルウェーの研究所に所属する研究員の専門的な発表が行われ、私も広島、長崎の原爆による人体への影響について、次のような講演を行った。

至近距離で被爆すると骨になってしまうが、一番悲惨だったのは、即死せず重症の火傷を負った人々だった。加えて、放射線の影響があった。初期の影響としては、脱毛があげられる。最大の標的となった臓器は骨髄で、放射線の影響により骨髄が空っぽになり、腸の粘膜が剥げて出血し、強い下痢を起こして多くの人が亡くなっていった。2～3年して白血病が多発し、その後ある程度治まるが、1970年前後には固形がんの増加が始まる。近距離被爆者は、多重がんになる確率が抜き出て高く、原爆病院にも毎年約600人の被爆したがん患者が入院してくるが、このうち約7%が多重がん、多い人となると、5番目のがんによる入院である。これは、全身の細胞が放射線を受けている結果であろう。固形がんの発症は、現在も続いている。被爆者が依然として固形がんになり、第二の白血病といわれる骨髄異形

成症候群（MDS）を起こしているということは、彼らの体の中に、がんや白血病をおこしやすい DNA の変化が起こっているということである。臓器には、生まれた時から備わった幹細胞というものがあり、この細胞が常に新しい細胞を供給している。まだ完全に証明されたとは言えないが、がんなどが生涯持続する理由は、幹細胞の DNA が損傷しているからではないか。これが、精子や卵子にも起こっているとすると、被爆 2 世にも影響が出る可能性がある。

もう 1 つの問題は、被爆者への精神的な影響である。1990 年に WHO が質問票を使って精神的な影響を測る方法（GHQ）を開発し、原爆後 50 年にしてやっと、精神的な影響の調査ができるようになった。この方法で被爆者約 7000 人を調査したところ、原爆の急性症状があった人、家族を失った人、がんになったことがあるという人は、非常にスコアが高く、一部にはうつ病や心的外傷後ストレス障害（PTSD）が見られた。核兵器は、遺伝子を標的とする兵器であるとともに、生涯にわたって精神的な影響をもたらす。医者を目から見ると、核兵器は最悪の疫病であり、しかも治療法がないのである。

セッション 2 「爆発の中長期的また地球規模の影響」

セッション 3 「爆発への備え」

セッション 2 では、国連機関や、核戦争防止に関わる団体などの専門的な発表が行われた。このうち、核戦争防止国際医師会議（IPPNW）の共同会長ヘルファンド（Helfand）博士は、インドとパキスタンとの局地的な核戦争を想定したシミュレーションを発表した。インドとパキスタンが、広島、長崎級の核兵器を 100 発程度打ち合ったとすると、2000 万の死者に加え、放射性物質による広範な汚染が起こる。また、建物の崩壊などによってすさまじい量の煙と煤が上空に舞い上がり、成層圏まで達して太陽光線を遮断する。これをきっかけに 1.8°C 気温が低下することによって、農業が破綻し、10 億人規模の餓死者が発生するというシナリオを示した。

セッション 3 では、国連機関や各国の放射線防護委員会関係者などが発表を行った。赤十字国際委員会（ICRC）のマリック（Malich）主任は、核戦争を生き延びるためにシェルターを作っても、最初の一撃には耐えられるが、長期的に農業が破壊されるために、一定期間が経つと食料供給が途絶え、結局皆死ぬことになる。このため、実際はシェルターを作った国はないと述べた。ルーマニアの放射線防護委員会のビシュー（Baciu）博士も、核兵器の放射線を防ぐ術はなく、唯一の対策は予防であると語った。

オスロ会議のまとめ

いずれの講演でも、専門家の立場から核爆発に対する緊急対応はほぼ不可能だということが強調された。これらの詳細は、ノルウェー外務省のホームページから見る事ができる。（http://www.regjeringen.no/en/dep/ud/selected-topics/humanitarian-efforts/humimpact_2013.html?id=708603）

セッションごとに15～20か国ぐらいの代表が3分程演説をするが、その大半は、核爆発のもたらす非人道的結末に対する認識を新たにし、根本的な解決は核兵器の核廃絶以外ないというものだった。インド代表やイラン代表も、核兵器の非人道性を認める発言をしている。会議の終了間際には、メキシコが、近い将来フォローアップ会議を引き受けるということを表示し、満場の拍手で迎えられた。

アイデ議長は閉会演説で、会議を通じて浮かび上がってきたことを次のように総括した。まず、核爆発により一瞬で引き起こされる人道上の危機に対して、いかなる国家や国際団体も十分に支援することはできないということ。また、支援を事前に準備しようとする試みも恐らく不可能であること。さらに、広島、長崎や数々の核実験の経験から、核兵器のもたらす壊滅的な影響が明らかになってきたが、冷戦が終結しても、核兵器の潜在的な脅威は変わらず存在し続けているということ。たった一回の核爆発であっても、戦争や誤爆、テロなどの原因を問わず、地球的規模で重大な影響を与えるのである。

オスロ会議全体としては、核の非人道性を認めるコンセンサスが形成された。しかし、今後どのように進むべきかということについて、具体的な取組みを提案する国は見られな



かった。これは、核兵器の非人道性から非合法化に向かう難しさを示していると言える。人道法の枠組みの中で、核兵器の非合法化をいかに進めていくのか。5Pが唱え、また、日本のように段階的に核軍縮をしつつ、究極的な核兵器廃絶を目指す国々を束ねる枠組みとして現在のNPT体制があるが、体制内の動きとともに、その外側で今回の国際会議のような新しい潮流が生まれてきたのは、歴史的に意義深いことである。

しかし、その潮流の具体的な方向性は、まだ見通せない。非人道的兵器である核兵器の必要悪としての役割に、とどめを刺さなければならない。次回のメキシコが開催するフォローアップミーティングで、具体的な方向性が出てくることを期待したい。

(写真キャプション)

・市民講座の会場風景